

マールラの變容 ——死魔から他化自在天へ——

岩 井 昌 悟

本論作成の動機 本論はニカーヤ・阿含に見られる成道記事¹⁾ ひいては「修行道」においても²⁾、菩薩または行者が三明または六通を得る前に四禪を経ることに着目し、諸佛傳經典に見られる降魔傳承のプロットが本来、マールラ＝欲界最上位者が初禪（色界）に入ろうとする菩薩の邪魔をするという構想によって組まれたものではないかという着想に發して、降魔傳承の成立の必然性とマールラが欲界最上位者に變容した理由について考察するものである。

成道記事における降魔の位置 降魔を含む成道記事におけるマールラの登場のタイミングと菩薩の初禪への入定のタイミングに着目して、資料を分類する。

「降魔＝成道」型（有部） これは菩薩がマールラを退ける中で次第に六通明を獲得して行くタイプである。菩薩の四禪への入定は定かではなく、少なくとも降魔の後ではない。『婆沙論』卷 103 (T27, pp.532b-533a) の「曾聞」として記載されるもの、『根本有部律破僧事』(T24, pp.122c-124b: *Saṅghabhedavastu*, ed. Gnoli, part I, pp.113-119), 『衆許摩訶帝經』(T3, p.950b-c) がこれに分類される。

「降魔⇒禪⇒三明」型 降魔と成道の間に菩薩の四禪への入定の記述が挿入されるもので、*Mahāvastu* (MV) の Avalokitasūtra 中のもの (MV II, pp.281-286), *Buddhacarita* (BC), 『佛所行讚』³⁾, *Lalitavistara* (LV ed. Lefmann, pp.299-357), 『方廣大莊嚴經』(T3, pp.590b-597a), 『普曜經』(T3, pp.516c-523a), 『佛本行集經』(T3, pp.774c-796b), 『過去現在因果經』(T3, p.641b)⁴⁾, 『佛本行經』⁵⁾ がこの次第をとる。

「四禪⇒降魔⇒三明」型 『修行本起經』(T3, pp.470b-472b) と『太子瑞應本起經』(T3, pp.477a-478c) の次第であり、菩薩が「四禪行を成じ」てから三十七道品の行に通じ、「得道」または「三解脱」(三活)を得たところではじめてマールラが登場し、降魔を経て三明(三術闇)を得る。

「降魔⇒二明⇒第四禪」南方上座部（アッタカター）南方上座部では、*Dīpavaṃsa* (Dpv) や⁶⁾、時代の下る *Paṭhamasambodhi* では⁷⁾、上記の「降魔⇒禪⇒三明」型をとるのに對し、Buddhaghosa の伝える成道次第は、宿住隨念智獲得

(198)

マーラの變容 (岩 井)

の前に禪定の記述がない⁸⁾。 *Nidānakathā* (J-A, p.75) も同様である⁹⁾。 禪に言及するのは *Dīghanikāya-aṭṭhakathā* (DN-A I, p.58) の次の記事である。これは *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* (BvA p.289) や *Jinakālamālī* (pp.28-29) にも引き継がれている。

「太陽が沈むころ、魔軍を破り、初夜に宿住を隨念し、中夜に天眼を清め、後夜に一切諸佛が宿習した緣相に智を向け、出入息による第四禪を生ぜしめ、それを基礎にして觀を増大させつつ、道の次第によって證得した第四道（阿羅漢道）によって一切の煩惱を捨斷し、一切諸佛の徳に通達した¹⁰⁾」。

因みにこの次第は全ての菩薩に適用される¹¹⁾。推測するに、南方上座部においてはこのマーラを破り、宿住隨念智と天眼の二明を獲得した後に、出入息による第四禪に入定し（そして出定して¹²⁾）觀を増大させるという次第のために、宿住隨念智獲得の前に禪や定に言及しないものが多いのであろう。この南方上座部の次第と無關係に思われないのが、*Śākyasiṃhajātaka*¹³⁾ の次第である。

「軍を破られたため、マーラが落胆していると、世尊は第四禪から出て次のように考えた（緣起の考察につづく）」 (tataḥ sainya bhagnād viṣādavati kusumaketau bhagavāṃś caturthadhyānād vyutthāyedam acintyat)

マーラの地位 上記資料の中、マーラを他化自在天と同一視するものは『婆沙論』卷103（他化天大自在主）、『過去現在因果經』（第六天魔）、『修行本起經』（典六天魔王）、『太子瑞應本起經』（第六化應聲天、天上魔王）である。他化自在天と區別しながらも¹⁴⁾、LV、『方廣大莊嚴經』、『普曜經』、『佛本行集經』は

「ここ、欲界においてマーラ・パーピーヤスは主であり、支配者であり、自在者である¹⁵⁾」として、マーラを欲界の最上位者として明示する。『根本有部律破僧事』も「欲界自在天主」(kāmadhātviśvaratva) または「欲界王」と呼ぶ。『衆許摩訶帝經』(T3, p.950b) も「尚得自在報應」という記述から同様に理解できよう。南方上座部は聖典部分ではマーラと他化自在天を區別するが、アッタカターでは、マーラが他化自在天に住して、そこで主権を行使するという¹⁶⁾。BCはマーラの地位について明示しない。MV (II, p.360) はマーラを他化自在天と梵天の間に位置づける。

考察 マーラにはすでに初期佛教聖典において、後世の四魔乃至五魔の分類の本になる屬性が付與されている。√ Mr (死ぬ) の派生語であることから「死魔」(maccumāra, mṛtyumāra) が本来の性質であろうが、「蘊魔」(khandhamāra, skandhamāra) や「行魔」(abhisāṅkhāramāra) も、マーラを五蘊¹⁷⁾ や眼・色・眼識など¹⁸⁾ の諸行として定義する經によって確認できる。煩惱魔 (kilesamāra, kleśamāra) は *Suttanipāta* (Sn) の 'Padhānasutta' (vv. 436-438) において①欲、②不快、③飢・渴、

④渴愛, ⑤惛沈・睡眠, ⑥恐怖, ⑦疑惑, ⑧偽善・強情, 利得・名声・尊敬・邪に得た名誉, ⑩自賛毀他が魔の軍 (senā) とされることに遡るであろう。

しかし以上のような抽象概念に還元できるマーラばかりでなく, 輪廻する存在としてのマーラも聖典中に見出せる。Majjhimanikāya 50 (MN 50 I, p.332) では目連の前生がマーラとされる¹⁹⁾。このようなマーラが次第に天界に位置を占めるようになったと想像される。しかし聖典中のマーラは(欲界の)天と區別され, Samyuttanikāya (SN) 5-7 はマーラに欲界の支配者としての屬性を与えつつ, 他化自在天とマーラを區別する²⁰⁾。また MN 49 (I, pp.326-331) によれば, マーラは色界の神(梵衆天 Brahmapārisajja)にさえ憑依(anvāvisati)でき²¹⁾, その該当箇所²²⁾の註 MN-aṭṭhakathā (MN-A) においては, 梵天衆(brahmagāṇa)が自身の領域内にいることをマーラが宣言する²²⁾。また, 説出世部の MV によれば, マーラの身體は意所成身であり²³⁾, これは有部の見解では色界・無色界の神の屬性である²⁴⁾。マーラの位置づけは初期の段階において欲界と色界の狭間を揺れ動いていたらしい。ところが佛傳文學の降魔の場面においては, マーラは欲界の最上位にある。ここに至るまでにマーラに何が起きたのか, 以下推測を交えて考察する。

馬場紀壽氏は「四諦型三明説」の成道記事に「緣起成佛説」を接合した「成佛傳承の結合」が「緣起型三明説」を生んだとされるが²⁵⁾, もうひとつの結合, すなわち「四諦型三明説」の成道記事と Sn の 'Padhānasutta' との結合があったと推測される。結合する際に, 降魔を四諦型三明説の記述のどこに挿入するか, その決め手となったのが先に挙げた 'Padhānasutta' の 10 の魔軍である。10 の魔軍の中の①⑤⑦が五蓋に含まれている。五蓋はニカーヤ・阿含に見られる「修行道」において, 禪定の妨げになるものとして初禪の前に斷たれる²⁶⁾。このように考えれば「降魔⇒禪⇒三明」型がもっとも一般的であることも首肯でき, これが本來であったであろう。四魔乃至五魔がどの時點で破されるかを示す諸資料において, 天魔と煩惱魔がセットになっていることも²⁷⁾, 以上の推測を支持すると思われる。しかしながら, この次第には反論が出ることも必然である。禪定を妨げるだけでは, マーラが矮小化されてはいないであろうか。Udāna-aṭṭhakathā において Dhammapāla が示すように, マーラは禪定ではなくて聖道を妨げるものであってよい²⁸⁾。このような動機から「降魔=成道」型や「四禪⇒降魔⇒三明」型が現れたのではないか²⁹⁾。南方上座部においても, 「降魔⇒二明⇒第四禪」型はおそらく Buddhaghosa の變更による次第であり, この次第の必然性が筆者には現時点では理解できないけれども, 本來は Dipavamsa の示す「降魔⇒禪定⇒三明」

(200)

マーラの變容 (岩 井)

型が伝わっていたと思われる。最後に、先には梵天界にも出現したマーラが、後に欲界に押し込められた理由について假説を提示する。煩惱魔（五蓋）としてのマーラが「降魔⇒禪⇒三明」型の次第を生み、まさにこの次第ゆえに、四禪が色界とされた時に、菩薩が色界に入る前に破する相手は欲界最上位者でなければならないと考えられたのではなかろうか。

- 1) 馬場紀壽『上座部仏教の思想形成』春秋社、2008年、p.72, 註(5)に擧がる資料。
- 2) 古川洋平「初期佛教における修行道の發展」『創価大學大學院紀要』第30集 2008年、pp.385-413。
- 3) *BC* (14.1-2)「それからマーラの軍を打ち負かし、堅固さと寂靜とによって、第一義諦を知見しようと欲する、禪に熟達した彼は、禪に入った。一切の種類の禪に最上の自在を得て、初夜分に次々と前生を想起した。」
『佛所行讚』(T4, p.26c22-25)「菩薩降魔已 志固心安隱 求盡第一義 入於深妙禪 自在諸三昧 次第現在前 初夜入正受 憶念過去生」
- 4) 『過去現在因果經』(T3, p.641b)「爾時菩薩、以慈悲力、於二月七日夜、降伏魔已、放大光明、即便入定思惟眞諦、於諸法中、禪定自在、悉知過去所造善惡」
- 5) 『佛本行經』(T4, p.78b)「(降魔につづいて) 於是現歷觀諸禪、於諸禪得最自在 憶念久遠初始事 前世所經如昨暮」
- 6) *Dpv* (p.14)「マーラの言葉を破り、軍ともども恐れさせて〔彼は〕勝利者となり、悦び、賢者となり、心が静まり、定に入った。觀の業處と如理作意と多の相に依止した種々の法を思惟した」。
- 7) *Paṭhamasambodhi* (p.139) *evaṃ suriye dharamāne yeva bodhisatto sasenam māraṃ palāpetvā virūlhamānehi bodhirukkha-aṅkurehi rattapabāladalehi* (原文 *pabālhadaledi* を訂正する) *viya pūjīyamāno* (原文 *pūjayamāno* を訂正する) *pathamayāme va sampatte atṭhasamāpattiyo nibbattetvā abhiññābalena pubbenivāsaṃ anussarituṃ ārabbi*。「このように、太陽がある間に、菩薩はマーラを軍勢ともども追い拂い、赤珊瑚の若い枝のような、發芽しつつある菩提樹の若芽に供養されつつ、初更に至ると、八等至を起こし、神通力によって前生を想起し始めた」。尚、*Paṭhamasambodhi* については拙稿「*Paṭhamasambodhi* 第14章 *Parinibbānakathā* 譯註研究」『東洋學論叢』東洋大學文學部紀要第62集、pp.90-95 參照。
- 8) 馬場紀壽『前掲書』pp.32-34 參照。
- 9) *J-A* (I, p.75) ≡ *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* (*BvA* p.8)
- 10) 馬場紀壽『前掲書』p.32 の①參照。
- 11) *DN-A* (II, p.461) に「波羅蜜を滿たした一切の菩薩は最後生において息子の誕生した日に偉大なる出家を出家して、苦行を行ない、菩提座にのぼり、魔軍を破り、初夜に宿住を隨念し、中夜に天眼を清め、後夜に緣相を思惟し、出入息による第四禪から起って、五蘊に集中して生滅によって50の相を見て、種姓智まで觀を増大させて聖道によって全ての佛徳に通達する ≡ *BvA* pp.83, 133, 184, 190, 289」とあり、

Samyuttanikāya-aṭṭhakathā (II, p.22) には「全ての菩薩は、出入息による第四禪から起つて、縁相に智を向け、それを順・逆に思惟して成佛する」と説かれる。

12) 本論前注参照。

13) Michael Hahn, *Haribhaṭṭa in Nepal, Ten Legends from His Jātakamālā and the Anonymous Śākyasimhajātaka*, Tokyo, 2007. 外園幸一「「シャーキヤシンハジャータカ」の和訳研究」『地域総合研究』19-2, 1992年, pp.225-260.

14) 他化自在天とマーラの同一視の部派間の揺れについては、岡野潔「『大いなる歸滅の物語』。(Mahāsaṃvartanikāthā) 第2章1節～3節に見る世界形成の正量部傳承」『哲学年報』第66輯, 2007年, pp.26-27, 注16)

15) *LV* (pp.299-300), 『方廣大莊嚴經』(T3, p.590b), 『普曜經』(T3, 516c), 『佛本行集經』(T3, p.774c)

16) *MN-A* (I, pp.33-34) so (pajāpati=māra) kuhiṃ vasati? paranimmitavasavattidevaloke. tatra hi vasavattirājā rajjaṃ kāreti. 浪花宣明『サーラサンガハ』平樂寺書店, 1998年, p.412 参照。

17) 五蘊 = māra : *Samyuttanikāya* 23-1 (*SN* III, pp.188-189) *SN* 23-11 (III, p.195), 五蘊 = māradhamma : *SN* 23-12 (III, p.195), 五蘊 = 「魔」: 『雜阿含經』124 (T2, p.40b-c), 五蘊 = 「魔所作」: 『雜阿含經』120 (T2, p.39b-c), 『雜阿含經』125 (T2, p.40c), 五蘊 = 「死法」: 『雜阿含經』121 (T2, pp.39c-40a), 『雜阿含經』126 (T2, pp.40c-41a)

18) *SN* 35-65 (IV, pp.38-39): 眼・色・眼識・眼識によって識知される法ある所, そこにマーラ, あるいはマーラの施設あり (yattha kho ... atthi cakkhum atthi rūpā atthi cakkhuvīññāṇam atthi cakkhuvīññāṇaviññātabbā dhammā, atthi tattha māro vā mārapaññatti vā)

19) 『中阿含經』「降魔經」(T1, pp.620b-623a), 『魔嬈亂經』(T1, pp.864b-866c), 『弊魔試目連經』(T1, pp.867a-868c) なお, *MV* には前生話の結合部において「マーラがその時, 某であった」とするものが多く見出される (*MV* II, p.243 など)。

20) *SN* 5-7 (I, p.133) 「三十三天とヤーマ天と兜率天と化樂天と (他化) 自在天の神々は欲の束縛に縛られて, 再び魔の支配下に入ります。」

『雜阿含經』1206 (T2, p.328c) 「三十三天上 炎魔兜率陀 化樂他自在 斯等諸天上 不離有爲行 故隨魔自在」

21) 註 (*MN-A* II, p.405) によれば, マーラは大梵天と梵輔天に憑依することはできない。なお對應する『中阿含』「梵天請佛經」(T1, pp.547a-549b) では「魔波旬在彼衆中」と表現されている。

22) *MN-A* (II, p.405): 「そこ (Brahmaloka) で [釋尊が] 說法して梵天衆を私の領域から越え出させない間に, 私 (マーラ) は行って法の説示への關心を失わせよう」

23) *MV* (II, pp.269, 277-278 Avalokitasūtra) において, マーラ (māro pāpimāṃ) は「沙門ガウタマは人であるが, 私は天子 (deviputro) である」と, そしてまた「沙門ガウタマの身體は母父より生まれたものであるが……, 私の身體は意所成身である」と述べている。もっとも *MV* は, 「諸如來は意所成身で生まれてくる」という特殊な教義も有している (I, p.218)。

24) 『婆沙論』(T27, p.363a) 「問。何故中有復名意成。答從意生故。謂諸有情或從意生。

(202)

マーラの變容 (岩 井)

或從業生。或從異熟生。或從姪欲生。從意生者。謂劫初人及諸中有。色無色界并變化身。」

なお『瑜伽師地論』(T30, p.853b)にも「復有二種意所生身。一者色界意所生身。二無色界意所生身。」とある。

25) 馬場紀壽『前掲書』, p.35-36.

26) 古川洋平「前掲論文」. Peter Masefield, *Divine Revelation in Pali Buddhism*, Routledge, 2008 (ただし初版は1986年), p.62.

27) *Udāna-A*. (p.216) *evambhūtena ca tena abhibhūto māro, ariyamaggakkhaṇe kilesamāro abhisāṅkhāramāro devaputtamāro ca carimakacittakkhaṇe khandhamāro maccumāro cā ti pañcavidho māro abhibhūto parājito*, (このようになった彼は「マーラに打ち勝った」). 聖道の利那に煩惱魔・行魔・天子魔を, 死心の利那に蘊魔・死魔を, 合わせて五種のマーラを打ち負かした.)

『阿毘達磨大毘婆沙論』(T27, p.657c)「有説。欲顯諸佛世尊能伏衆魔留捨壽命。謂證無上妙菩提時已伏二魔。謂天・煩惱。今將證入涅槃界時。又伏二魔。謂蘊及死。伏蘊魔故捨多壽行。伏死魔故留多命行。」

『阿毘達磨大毘婆沙論』(T27, p.680b)「有説。初受食已摧破二魔。謂煩惱魔。自在天魔。後受食已亦破二魔。謂蘊魔・死魔。有説。初受食已入有餘大涅槃界。後受食已入無餘大涅槃界。佛依如是種種因緣。説二種施果無差別。」

『俱舍論』(T29, pp.15c-16a) 毘婆沙師作如是説。顯今能伏蘊死二魔。世尊先於菩提樹下。已伏天魔・煩惱魔故。

ただし菩提樹下で一切諸魔を破したと解釋できるものもある。

『方廣大莊嚴經』(T3, p.596b) 於此菩提樹王下 降伏一切大魔軍……尊能降伏於蘊魔 死魔煩惱及天魔 一切諸魔皆斷滅 是故今者無憂惱

LV (p.354) *anena jitu skandhamāras tatha mṛtyu kleśamāraḥ anena jitu devaputramāras tenāsyā nāsti śokaḥ*

MV (III, p.281) *iha mama kleśamāro bhagno mṛtyumāro bhagno skandhamāro bhagno devaputramāro bhagno*. ただし *MV* (III, p.273) では煩惱魔と天魔のみに言及している。

少し異なるものとしては『大智度論』(T25, p.99b)「魔有四種：一者煩惱魔，二者陰魔，三者死魔，四者他化自在天子魔。是諸菩薩得菩薩道故，破煩惱魔；得法身故，破陰魔；得道，得法性身故，破死魔；常一心故，一切處心不著故，入不動三昧故，破他化自在天子魔。」

28) 前註参照。

29) これは吹田隆道氏の説と逆の結論になる。吹田隆道「降魔成道と降魔一婆沙論が説く「降魔成道」の口傳」『石上善應教授古希記念論文集 佛教文化の基調と展開』山喜房佛書林, 2001年, pp.203-218 (L)

〈キーワード〉 降魔, マーラ, 他化自在天, 四禪, 佛傳

(東洋大学専任講師, 博士(文学))